

【高校生との進路展望懇談会】

2024年10月19日に高校生との進路展望懇談会が行われた。まず、大学とはどのような場所であるのか、高等学校との違いに関することが話題に挙がった。高校生は大学進学を考えるにあたって、実家から通うのか、あるいは下宿をするのかについて考えているようだ。例えば、大学進学するためには県外に出るのは必須であるが、〇〇県は遠いから〇〇県の大学進学を考える高校生もいれば、地元を離れて一人暮らしをしてほしいという高校生もいた。このことより、通学可能であるか熟考するとともに、可能な限り生徒の願いに寄り添えるよう選択肢や情報を提供するサポートが望まれると考えられる。

次に、高校生が教育学部への入学を希望する理由について話題に挙がった。そのなかには、自分を変えるきっかけを作ってくれた教師への憧れ、ROOKIES やダイヤの A のような作品に登場する教師への憧れがあった。不登校時の教師の関わり、慣れない環境での教師によるフォロー、担任でなくても関わりをもってくれる教師が、この場での高校生にとって良い教師像として挙げられた。このことより、教員の志望動機として、自分自身と関わりをもった教師への憧れが大いにあることがわかる。一人一人の児童生徒に対して親身に寄り添った関わりが重要であるようだ。

このように教育関係の就職のために大学進学を考えている生徒がいる一方で、教育関係以外の進路を考えている生徒もいるようだ。その理由としては、幼稚園教諭や保育士の仕事の大変さをよく聞くことや一般企業への就職との迷いがあるようだった。このことより、教育関係の職業の実際や一般企業への就職に関する情報提供が必要であり、そうした取り組みが生徒の不安の払拭や進路選択の幅を広げることができると考えられる。

【10月20日に行われた「わくわく科学体験」】

2024年10月20日に、「わくわく科学体験」が実施された。企画内容として、「ふらふらバランスとんぼ」、「ボトルキャップシューター」、「プラ版キーホルダー」が行われた。

「ふらふらバランスとんぼ」ではとんぼのデザインを考えると、1人が幾何学模様を作り始めると、そのテーブルに集まっていた全員の子どもが真似を始め、周囲に関心を持ち自分の作品に取り入れる力があるようであった。また、ある小学校低学年の男児は、柄がついているものをじっくりと見ながら無地のとんぼの羽に自分で柄を真似て描いており、観察する力やそれを真似る力をもっているようであった。5歳児にとって、はさみを使い線に沿って切るという作業は少し難しいようであったが、中学生がはさみで上手に切る姿をじっと見つめる様子や、切る作業を上手く終わらせた後に嬉しそうにしていた姿から、制作を通じた交流が中学生や年上の存在に憧れを抱く瞬間でもあったのではないかと感じた。制作を終えとんぼを使って遊び始めると、とんぼが棚の角にもくっつくことを発見して共有する姿や、羽の折れ具合の違いを見出し、「簡単なポーズ」「難しいポーズ」などと形に着目して遊ぶ姿も見られた。このような様子を見て、ボトルキャップシューターで遊んでいた子どもは完成したとんぼやそれを使って遊ぶ姿を見て目を輝かせ、とんぼ作りに熱中して取り掛かり始めた。

「ボトルキャップシューター」では、はさみで紙を切る作業のときに隣で一緒に作っていた友人の進捗度合いを見ながら、急いで作ろうと頑張っている姿が見られた。このように周囲を見て他の子どもを意識していると捉えることができる姿は遊んでいる最中にもあり、「今あの子裏で当てたよ、どうやったんだろう」という発言や、「僕もあれぐらいもつととぼしたい」という発言があった。周囲の人々に刺激を受け、意欲や好奇心に繋がっている姿が見受けられた。また、子どもたちと中学生との相互作用も見られた。子どもたちはただまっすぐとぼだけではなく、上に向かってとぼし、その反発で前にある壁にキャップをあてようと工夫して遊んでいた。そのような子どもたちの様子を見たことで、ボランティアの中学生がペンを使って前の壁に新しく的を作るといような、その場で生まれた相互作用による交流が見られた。

「プラ版キーホルダー」作りでは、活動時間の序盤にプラ版キーホルダーを作成しに来た子どもたちは特に話すことなく黙々と活動に集中して取り組んでおり、その熱中している様子から意欲がうかがえた。また、保護者と共に来ていた子どもは頼れる保護者の存在がいたからか、中学生や高校生との関わりが少なかった。さらに、「イラストの紙とプラ版がずれないようにテープ貼る？」という中高生の提案に無言で頷く様子や、「めっちゃ真剣に描いてるよ」という中高生の言葉に反応を示さない子どもの様子も見られたが、一方で先生に「これ黒い線つけた方がいいと思うよ」と助言されると、先生の方を向き、安心したようにこやかな表情で「うん！」と答える様子も見られた。加えて、白色のペンがないことに気がついた子どもが中高生に尋ねることができず、友人に相談する場面も見られた。これらのことから、初めての場所での新鮮な活動や、出会って間もない中学生・高校生との交流は緊張を強く感じるものであったと考えられる。

作ったものを焼き始め、縮んでいくところを身をかがめてオープンを覗き込むように興味深く観察している様子や、作り終わったキーホルダーを嬉しそうに眺める姿、また出来上がった作品を「上手だね」「すごいね」と褒め合う姿も見受けられた。そのような熱中して楽しむ雰囲気が作品から伝わったのか、同じ机に座っている子どもの作品を見て「私も同じの作りたい」といような周囲を意識した発言もみられた。

【10月20日に行われた大学生と高校生との懇談会】

2024年10月20日に、大学生と保育科の高校生との懇談会が行われた。ここでは、大きく2つのことが話されている。

1つ目は、高校生から大学生へ保育現場における困りごとへの対処など、実践的な技術に関わる質問がされた。例えば、高校生たちは、子ども同士で喧嘩が起きたときや、複数の子どもたちが一気に話しかけてきたとき、どのように対応すればよいか分からないと感じているようである。この質問に対して、大学生たちは、自身の実習での経験や、保育者の方から聞いた話などを高校生へ伝えた。このように、実習を多く積み重ね、より多くの経験と知識をつけてきた大学生から意見やアドバイスもらうことは、異なる視点を得ることにもつながり、高校生にとって大変有意義な時間であると考えられる。また、悩む人は自分だけではないということを知り、自分には向いていないかもしれないといった将来への不安を減らすことに繋がるだろう。また、大学生への憧れも喚起される可能性も考えられ、その結果、このような大学生と高校生が互いに話し合う機会は、高校生が保育についてもっと知りたいと思うことができる機会となったり、将来的に保育者を目指す動機を高めることにつながるのではないかと考える。

また、高校生から、大学の勉強の中で実習に活かされたことは何かという質問もあった。高校生が今行っている勉強や実習とどのように異なるのか気になったのであろう。また、この質問をすることにより、自分の進路を考える際に、参考にしたいと思ったのかもしれない。この質問に対して大学生は、手遊びや絵本が特に実習に役立ったと伝えた。一方、高校生側からも、手遊びを高校で学ぶことで、実習の機会に生かすことができたという。このことから、年齢や経験に関わらず、保育を学ぶ学生が実習ではじめに直面することは、子どもとどのように関わるかということであり、子どもと楽しくよい関係を築くことができるスキルが役立ったのではないかと考える。

2つ目は、高校生たちが高校入学時に保育科を選んだ理由や、高校生自身が今考えている将来について話された。高校生たちは、「子どもが好きだから。」「高校の間から保育について学ぶほうが馴染めるし、将来学ぶことの力になるから。」というような理由で保育科を選んでおり、その中には、将来幼稚園教諭の道も考えながら、まずは栄養系の勉強をする予定であると自分の将来を考えている高校生もいた。このように、入学の決め手としては必ずしも幼稚園教諭や保育士になることを前提とはしておらず、高校で保育について学びながら、将来を考えているようである。しかし、子どもが好きであるということは比較的共通しているのではないかと感じる。このような高校生たちにとって、早期に保育について学ぶことは、将来大きな力になるのではないかと感じる。大学生も熱意をもって保育に向き合う年下の高校生たちの話を聞き、一層励もうと感じる機会になったのではないかと思う。